

散歩

濱田湧壮（熊本大学）

時計の針が頂点で重なった時間。

帰りの電車で、マツクの袋を抱えた男を見かける。

家族のために買ったのだろうかと思う。

誰かのために何かするときの笑みを浮かべている。

降りる駅が同じだったので、僕は男に付いていく。

角を曲がる背を追っていく。

男は僕より歩くのが速く、それは身長とか慣習とかの問題じゃなく、たぶん目的の問題だった。

男との距離は徐々に開いていき、僕は途中で立ち止まる。

家に入ると男は、妻と小学四年生になる息子がいないことに気づく。

ちょっとした買い物に出ているんだろうな。

待っていてもなかなか帰ってこなくて、ポテトが冷めはじめ、コーラの炭酸が抜けていく。

妻と息子は三十分ほどで戻ってくる。

二人でジムに行っていたのだが、帰りのバスが遅れたのだという。

シャワーを浴びてくると浴室に向かった妻を

男は立ち上がって追いかける。

何か、そういうタイミングだったのだろうか。

僕はそのまま一人暮らしの部屋に帰る。

服や書類や本で足の置き場がないくらい散らかっている。

僕は右足首を捻挫して

いつもより慎重にベッドに向かう。

眠りたいのに眠れない。

中途半端に閉じたカーテンの隙間から

白んでいく空が見える。

もうすぐ職場に向かわなければ。

そういえばこれからジムに行こうと思っていたんだ、体を鍛えたいんだ。

それからその男の息子は散歩に出た。

晴れた日に知らない住宅地を歩くのが日課なのだった。

歩きながら自分が巨人になった妄想をするのだ。

巨大な手で、他人の家の屋根をはがし、壁を崩し

住人を外へと追い出す。薄暗い部屋に日の光を当てる。

日の光には人の頭をぼーっとさせ、記憶を奪う効力があつて

それですべての人が家族のことや、友達のことや、自分のことを忘れるんだ。

そして一緒に散歩するんだ、晴れた日の廃墟を。

結局眠れなかった僕は身支度を整えると、

人と会う予定のため美容院に行く。

高い金を払ってストレートパーマをかけ、眉も整えてもらう。

美容師に、手大丈夫ですかと尋ねられ、腱鞘炎なんですと答える。

僕は左手に包帯を巻いている。

駅に向かう途中で中学生くらい女の子を見かける。

誰かに似ている気がする。

女の子はぼんやり目の前のアパートを見上げていて

すれ違うとき、私もいつか結婚するんだろうな、とこぼす。